



短編物語

まさ

僕は中学2年生の堀内正隆という、まあ普通の中学生で、特に問題も起こさず、特に目立った人間でも無い。

昨日、同じクラスのよしえちゃんが交通事故で亡くなった。

学校からの帰宅中だったということだった。

先生から朝、その事をクラスの皆に伝えられた。

僕もそれまで知らなかった。

それ程、親しくしていた訳ではないが、それを聞いて吐き気がした。

お腹がムカムカし、朝、食べた納豆が逆流してくるような感じがし、昨日の事が、映画を見ているように僕の頭に映った。

僕か？

僕のせいかな？

それとも偶然かな？

っと思いながら、回想が勝手に始まった。

昨日の帰宅途中、急に「これっ」と言ってよしえちゃんがどこからともなく目の前に現れ、手紙をくれた。

僕は、よしえちゃんの目を見つめながら、「これ？」と言って手紙を受け取った。

よしえちゃんの目と顔から照れているのが分かった。

僕は見つめていた。

そして彼女は恥ずかしそうに去って行った。

あと、2秒待ってくれていれば、僕はおそらくそれがラブレターと理解し、もっとまともな返事が言えたかもしれない。

だが僕は頭で理解する前に、歩き出していた。

そして、振り返った。

よしえちゃんは、下を向いて走り去っていた。

おそらくあの、照れている顔のままだろう。

彼女は、10メートル程先の角を曲がった。

しばらく歩いていて、僕は後悔した。

せめて、ありがとうとか、言えたはずだった。

少し、話もしたかったかもしれない。

しかし、僕はきっとキョトンとびっくりした顔で、「これ？」と言った。

少し間があった。

それが彼女を気まずい感じにさせたのかもかもしれない。

そして、彼女は後ろを向いて走り出した。

角を曲がってもしばらくは走っていたに違いない。

きっと踏切で電車が来ようと、交差点で車が来ようと、飛び出してしまうのではと思った。